

安全なキャンプ のために

PART 4 ～危険を学ぶ～



社団法人 日本キャンプ協会

キャンプの安全について 考えましょう

自然の中で、家族や仲間たちと楽しむことが出来るキャンプは、私たち現代人にとって、かけがえのない素晴らしい活動です。

最近ではキャンプ用品や用具などの普及によって、より多くの人々が気軽にキャンプを楽しめるようになってきました。

しかし、それに伴ってアウトドアの活動中の事故やケガが増えてきていることも見逃せません。

キャンプは自然の中で行われるものだけに、安全に対する配慮を忘れてはなりません。楽しいはずのキャンプで事故に遭ったり、健康を害したりすると、とたんにキャンプがつまらないものになってしまいます。

キャンプに限らず、安全は与えられるものではなく、自らが作り出すものです。

この冊子ではキャンプで想定される10の場面を取り上げ、その場面にある危険を考えることによって、安全で楽しいキャンプを作り上げようとするものです。

最初は絵を見て、その中にある危険なところを一人ひとりでチェックしてみましょ。そして、次のページの解説を見ながら、家族や仲間たちと話し合っ、安全なキャンプのための方法を確認しましょ。

野外活動での注意すべきことがらを知り、これを守り、ひとりでも多くの人が安全で楽しいキャンプをすることが出来るよう願っています。

(社) 日本キャンプ協会 安全管理委員会

◎野間口 英 敏	高 見 彰
○畠 中 彬	長 井 せつ子
伊地知 祐 介	中 村 正 雄
大 橋 光 雄	眞 木 潔
佐 藤 初 雄	(◎委員長 ○副委員長)



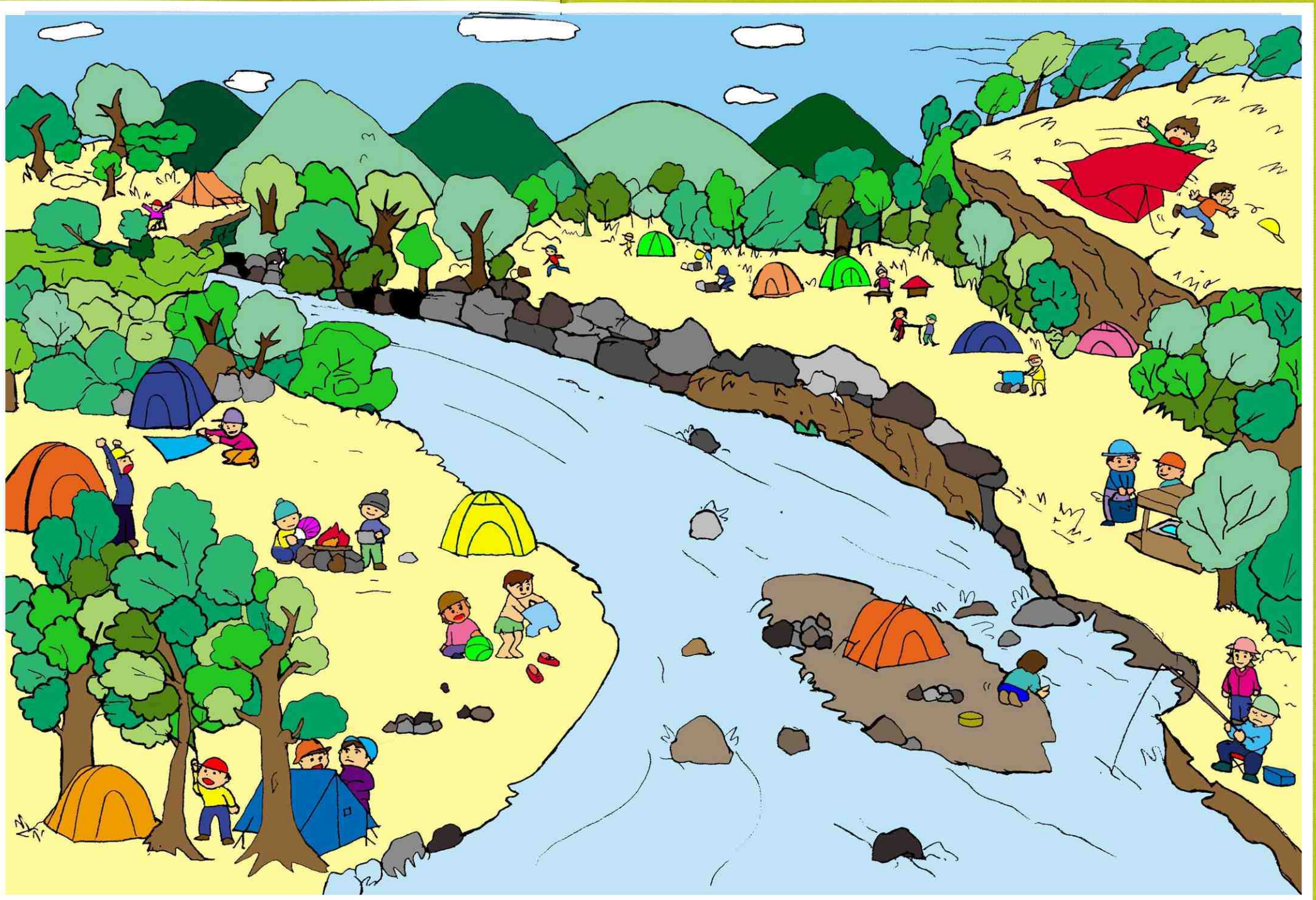
もく じ

	ページ
1. テント設営での危険	2
2. キャンプ場での危険 (昼間)	6
3. キャンプ場での危険 (夜間)	10
4. 野外料理での危険 (総合編)	14
5. 野外料理での危険 (燃焼器具編)	18
6. 野外料理での危険 (調理用具編)	22
7. ハイキングでの危険	26
8. 川遊びでの危険	30
9. 海辺での危険	34
10. キャンプファイヤーでの危険	38

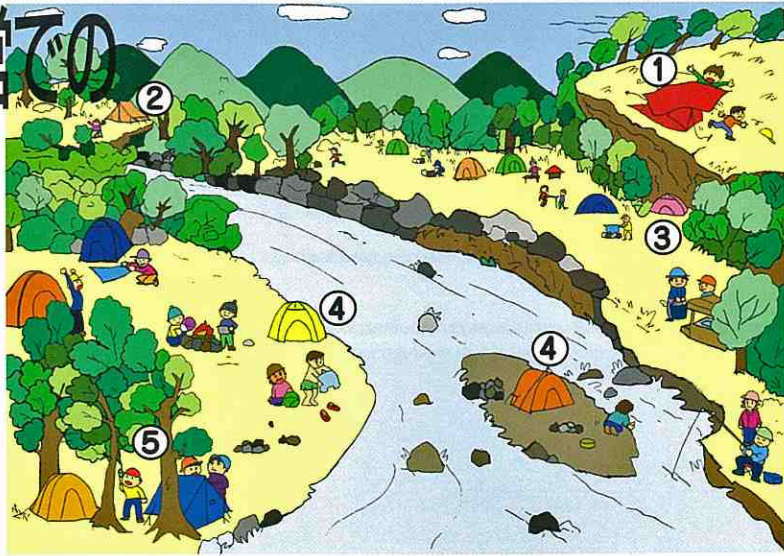
どこにどのような危険があるか考えてみよう

楽しそうにキャンプしています。いろいろなところにテントが張られています。事故につながる危険な場所に張られたテントも見かけられます。危険なところに張られているのはどのテントで、どのような危険があるか、みんなで考えてみましょう。

1 テント設営での危険



1. テント設営での危険



ここが危ない！

① 風が吹き抜ける場所にテントが張られている

このテントは風が吹き抜ける場所に張ってあります。この場所のように周囲に風をさえぎるものがなく、吹きさらしになる場所では強い風が吹きやすく、テントごと飛ばされる危険があります。

また、夜間に強い風が吹くとテントがパタパタと音をたて、一晩中寝られないということもあります。睡眠不足から体調を崩すことにもなりかねません。

このような危険や健康を損なうことがあるので、風が吹き抜ける場所には、テントを張らないようにしましょう。



② 崖の上にテントが張られている

このテントは崖の上に張ってあります。崖はいつ崩れ落ちるかわかりません。崖崩れによりテントごと落下する危険があります。また、夜間に行動するときなど懐中電灯の明かりだけでは、足を踏み外して崖から転落する危険もあります。

崖の上にはこのような危険があるので、テントを張らないようにしましょう。



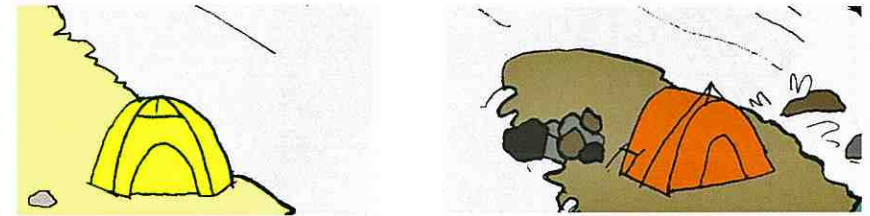
③ 崖の下にテントが張られている

このテントは崖の下に張ってあります。崖はいつ崩れ落ちるかわかりません。崖崩れが起きると、土砂でテントごと押しつぶされてしまう危険があります。また、雨や風、ちょっとした振動などによって落石の危険もあります。

崖の下にはこのような危険がありますので、テントは張らないようにしましょう。



④ 河原や中州にテントが張られている



テントが河原や中州に張られています。河原や中州は雨などで川が増水して、テントごと流される危険があります。特に中州は晴れているときは陸のように見えますが、いったん雨が降ると増水し川底となり、テントが流される危険があります。

1999年8月、神奈川県山北町を流れる玄倉川の中州で、キャンプしていたファミリーキャンパー18人が大雨で増水した川にテントごと流され、子どもを含めた13人が亡くなりました。

川の中州は、川底と同じだと考え、テントは絶対に張らないようにしましょう。

⑤ 木の下にテントが張られている



テントが木の下に張られています。木の下は安全のように思われますが、雷の多い所では、木に落ちた雷の側撃を受ける危険があります。木のそばにテントを張るときは、木を地面から見上げる角度が45度以上の範囲内で、なおかつ、木の枝、葉、幹から最低2メートル以上離れた場所が安全な場所といわれています。

また、木によっては、強風で倒れたり折れたりする危険もあるので注意しましょう。

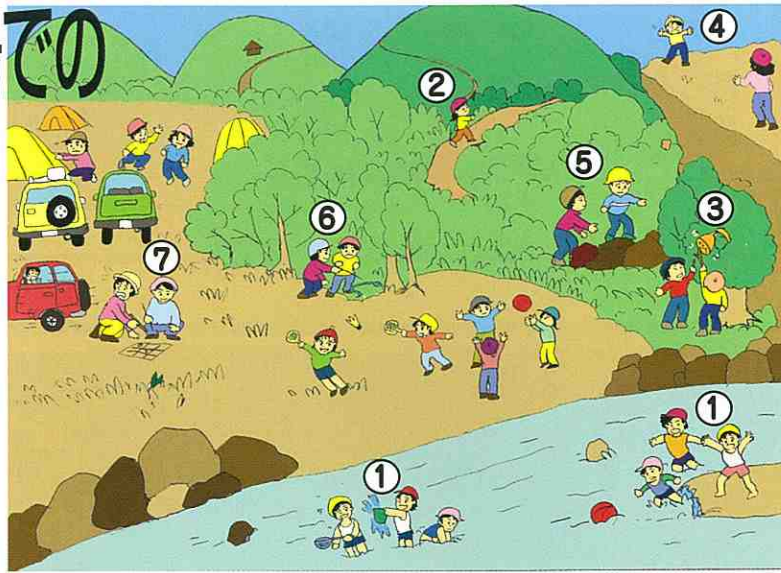
どこにどのような危険があるか考えてみよう

キャンプ場で、子どもたちが遊んでいます。
楽しそうに遊んでいます。危険な遊びや危険につながる行動も見られます。
どこにどのような危険があるか、みんなで考えてみましょう。

2 キャンプ場での危険 (昼間)



2. キャンプ場での危険 (昼間)



ここが危険!
!

① 子どもたちだけで川の中で遊んでいる

川の中で子どもたちが楽しそうに遊んでいますが、その近くに大人がいません。川の深さは子どもの膝くらいですが、この深さでも流れに足をとられて流される危険があります。また、川底には深みがあって、溺れる危険性もあります。子どもに川遊びをさせるときには、事前に水流や川底の状態、水深などについて調べておく必要があります。そして、子どもが川遊びをしているときは、必ず大人が川の近くで、子どもたちから目を離さないよう見守りましょう。



② 子どもが一人で山道を歩いている

自然の中では、日常生活環境とは異なり、どのような危険が待ち構えているかわかりません。一人で行動することは危険だけでなく、事故が起きたときに助けを求めることもできず、重大事故に結びつく可能性があります。これは子どもだけでなく、大人についても言えることです。自然の中で行動するときは、必ず大人が付き添うようにします。また、大人であっても一人で行動することは慎みましよう。



③ ハチの巣を棒でつついている

子どもが、ハチの巣を棒でつついて遊んでいます。このように巣をついたりしてハチを刺激すると、ハチは自分の生活を守るために人に襲いかかり、刺すなどして大変危険です。スズメバチは日本中どこにでもいて、巣は樹上だけでなく人家の天井裏や地中にもつくります。巣を見つけたら、むやみに石を投げたり棒でつついたりして刺激しないようにしましょう。万一襲われた場合は、姿勢を低くしてゆっくり後ろに逃げるようにします。スズメバチは夏から秋にかけて、活動が活発になり危険な時期となります。この時期には、よりいっそうの注意が必要です。日本では、スズメバチに刺されて死亡する人が年間に30人~40人にもなっています。



④ 子どもが崖の上で立っている

子どもが崖の上の先端部に立っていて、それを見た大人が走り寄ろうとしています。崖の先端部には、危険防止のための柵もありません。このままでは足を踏み外して、崖から転落する危険があります。この場面では、大人が気づいたからよかったものの、気がつかなければ滑落や転落といった重大事故が起きる可能性もあります。野外では、いろいろなところに危険があります。大人は子どもの行動について、片時も目を離さないことが事故を防ぐ上で大切です。



⑤ 崖の下で遊んでいる

子ども二人が崖の下で遊んでいます。このような崖の下では、崖崩れによる土砂の下敷きになる危険、風雨などによる落石の危険があります。その他にも崖の下にテントを張ったり、かまどなどを作って野外料理をしたりすることも危険です。崖下は、多くの見えない危険が隠されているので、十分な注意が必要です。



⑥ 棒で蛇をつついている



子どもが蛇を棒でつついています。毒をもった蛇に咬まれると大変危険です。蛇は刺激しない限り襲ってきませんが、棒でつついたり捕まえようとすると驚いて襲いかかることがあります。蛇を見かけても手を出さないことが、咬まれないための予防になります。また、裸足やサンダルなどで、草むらに入らないようにすることも大切です。日本にいる毒蛇は、マムシ、ヤマカカシ、ハブの三種類で、ハブ以外は日本の全土にいます。

⑦ 子どもが遊んでいるところに車がバック

子どもが遊んでいるところへ、車がバックしてきています。車がテントサイトまで乗り付けることのできる、オートキャンプ場において見られる危険です。キャンプ場内には他のファミリーキャンパーもいて、多くの子どもたちが遊んでいます。キャンプ場内で車を運転する時は、車の速度やバックするときの後方の確認、子どもの飛び出しなど、一般道を走るとき以上に安全運転が求められます。子どもにも車が通るところや入ってくる場所では、遊ばないように注意しておくことが大切です。



どこにどのような危険があるか考えてみよう

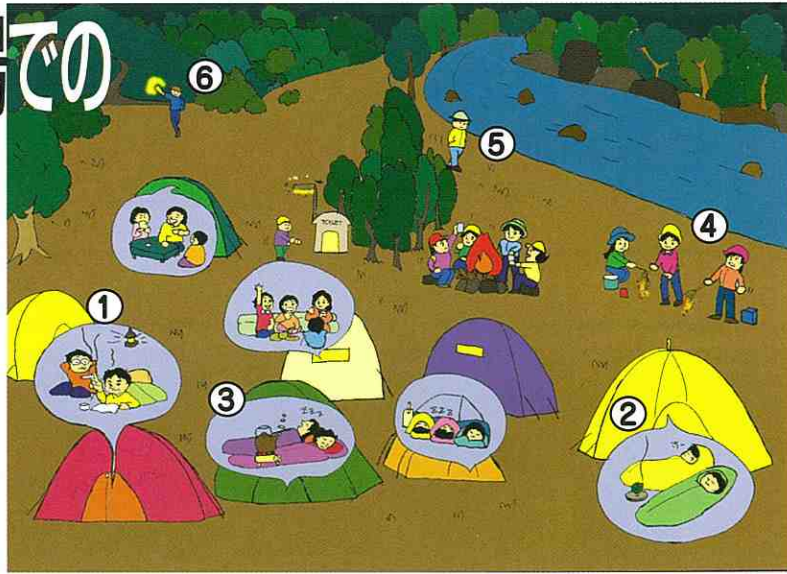
この場面は、キャンプ場の夜の風景です。
キャンプ場の夜は、昼間とは違った面白さや楽しさがたくさんあります。
キャンパーはいろいろなことをして過ごしていますが、危険な状況や事故につながる危険な行動も見受けられます。
どこにどのような危険があるか、みんなで考えてみましょう。

3 キャンプ場での危険 (夜間)



3. キャンプ場での危険 (夜間)

ここが危ない！



① テントの中でタバコを吸っている

テントの中でタバコを吸っています。不注意や不始末でタバコの火がテントに引火することも考えられます。

テント火災の怖さは、大火傷や死亡に直接つながることです。特に、「寝タバコ」は危険ですから絶対に止めましょう。

また、テントの外でも「タバコの投げ捨て」が大きな山火事などにつながることも知られています。タバコは決められた場所で吸うようにし、吸い終わったあとは完全に火を消すようにしましょう。



② テントの中で蚊取り線香を焚いている

夏のキャンプでは、テントの出入りで扉を開け閉めしたときに蚊がテントの中に入り、安眠を妨げられることがあります。だからといって、テント内で蚊取り線香を焚いて寝たりすることは避けましょう。蚊取り線香から寝袋に火が燃え広がり、焼死するという事故が起きています。

むしろ、寝る前に殺虫剤などで蚊を退治してから寝るようにしましょう。



③ テントの中でコンロにやかんを掛けたまま寝てしまっている

夏の季節のキャンプといえども、場所によっては夜間にかなり冷え込みます。夏以外の季節ではなおさらです。このようなときには、どうしても暖をとりたくなります。しかし、テントの中でコンロを使用するのは危険です。コンロの使用による、酸欠や一酸化炭素中毒の危険があるだけでなく、テントに引火することもあります。これらはいずれも重大事故につながるため、テントの中では燃焼器具類の使用は絶対に止めましょう。



④ 子どもだけで花火をしている

子どもたちが楽しそうに花火をしています。キャンプ場での花火はよく見かける光景ですが、この場面では近くに大人がいません。

キャンプ場に限ったことではありませんが、花火をするときには点火するときの火傷の危険のほか、花火を振り回したり、風にあおられることによって、衣服等に火が燃え移って火傷したり、場所によっては周囲に引火する危険があります。

花火をするときには、必ず大人が付き添い、そばに水の入ったバケツを用意しておくなどして、万が一の危険に備えましょう。



⑤ 懐中電灯を持たずに歩いている

散歩でもしているのでしょうか、川のそばを懐中電灯も持たずに歩いている人がいます。キャンプ場の夜は、暗闇につつまれるところが多くあります。

野外では昼間でも、どんな危険が待ち受けているかわかりません。ましてや夜間に懐中電灯を持たずに行動することは大変危険です。

この場面では、歩いているそばに川があるので、過って川に落ちて重大事故に結びついてしまうことも考えられます。外灯のないキャンプ場で夜間に行動するときは、懐中電灯等を用意するようにしましょう。



⑥ 一人で山の方に向かって歩いている

山頂に星空でも眺めに行くのでしょうか、一人で山奥に向かって歩いている人がいます。キャンプ場のように都会から離れたところでは、すばらしい星空を眺めることができますが、一人で行動するのは大変危険です。

野外には予想できない危険がたくさんあります。また、日中は危険でなかったことが、夜になると危険になることもあります。一人では危険に遭遇したときに、助けを求めることもできず、重大事故につながりかねません。

夜の野外では、子どもはもちろん、大人であっても、絶対に一人で行動しないようにしましょう。



どこにどのような危険があるか考えてみよう

みんなで食事の準備をしています。どんな料理ができるのでしょうか。食べるのが楽しみですね。
 キャンプでの食事づくりは日常とは違って、かまどを作ったり、薪や木炭で火をおこしたり、料理するにもいろいろな工夫が必要になります。従って、慣れないことをするための危険が生じます。この場面にも、事故につながる危険な行動や状況が見られます。
 どこにどのような危険があるか、みんなで考えてみましょう。

4 野外料理での危険 (総合編)



4. 野外料理での危険 (総合編)

ここが危ない！



① テントのすぐそばに火を燃やしている

張られているテントのすぐそばに、かまどが作られ火が燃やされています。このようにテントのすぐそばにかまどを作り火を燃やすと、火の粉や炎でテントが燃える危険があります。かまどは、テントだけでなく付近に燃え移りやすいものがないかどうか、確かめて作りましょう。また、ときには強い風が吹いて、火の粉が飛び散る危険性もあるので、風向きなども十分



② かまどの火が無人で燃えている

かまどで火が赤々と燃えています。近くに人がいません。野外ではかまどの火の粉や炎が風にあおられて、近くのものに燃え移り火災になる危険があります。野外で火を燃やすときは、このような火災を防ぐために、必ず「火の番」がいて火を見守ることが大切です。かまどの近くには万一の場合に備えて、水を入れたバケツを置いておくことも必要です。



③ 着火剤をつぎ足している

薪が燃えているのに着火剤をつぎ足そうとしています。メチルアルコールが主成分であるゼリー状の着火剤は、日中の明るいところでは炎が見えにくいという特徴があります。このため「薪が燃えていない」、「薪の燃えが悪い」と思い込み、つい着火剤をつぎ足してしまいがちです。このように不用意に着火剤をつぎ足すのは危険です。突然炎が噴き上がり、顔や手などに火傷を負う危険があります。火をつけた後の着火剤のつぎ足しは止めましょう。



④ かまどの火を子どもが棒でつついている

日常生活の中では、裸火を直接見る機会はほとんどなくなってきました。子どもたちは火には特に興味を持ちます。そのうちただ見ているだけでなく、棒で火をつついて遊び始めます。燃えている火をつつくと、火の粉や炎で火傷をしたり、火が飛び散って周囲のものに燃え移ったりする危険があります。このような危険を防ぐために、子どもの火遊びには十分に注意しましょう。



⑤ 子どもが大きな石を運んでいる

食事の準備で子どもが、かまど作りを手伝っています。大きな石を運んでいます。足の上に石を落としたり、転がっている石や木の根につまづいて転倒すると怪我をします。キャンプでは子どもが手伝いできることがたくさんありますが、怪我をしてしまっては何もなりません。子どもの手伝いについては、手伝う内容にともなう危険について、事前に注意を与え、怪我をしないように見守ることも大切です。



⑥ かまどにかけてある熱い鍋を素手で持とうとしている

よくあることですが料理に夢中になり、かまどにかかっている熱くなった鍋を、ついうっかりして素手で持ち、火傷をしてしまうことがあります。このような火傷を防ぐために、野外料理では火に強い木綿の軍手や革手袋をつけるよう習慣付けましょう。(化繊の軍手は火を扱うときには危険です)安全管理委員会では「軍手の安全実験」を行い、その結果を「安全なキャンプのためにPART3」で報告してありますのでご参照ください。



⑦ ナタを持つ手に軍手をつけて薪を割っている

薪割りをしています。ナタを持つ手に軍手をつけて、薪を素手で持っています。ナタを持つ手に軍手をつけると、ナタが滑りやすく、手元が狂って薪を持っている方の手を傷つけたり、ナタがすっぽ抜けて周りにいる人に当たる危険があります。ナタで薪を割るときにはナタを持つ手は素手で、薪を持つ手には必ず軍手をつけ、切り傷や打撲の危険から身を守るようにしましょう。



⑧ よそ見をしながら鍋を持って歩いている

鍋を持って、よそ見をしながら歩いています。前方には積み上げた石があります。このままでは石につまづいて転んでしまいます。鍋の中に熱いものが入っていたりすると、大火傷を負ってしまう危険があります。この他にもキャンプ場内には、石が転がっていたり、木の根が張り出していたりして、障害物がいたるところにあります。このような場所では、十分に足元に注意を払って歩くようにしましょう。



どこにどのような危険があるか考えてみよう

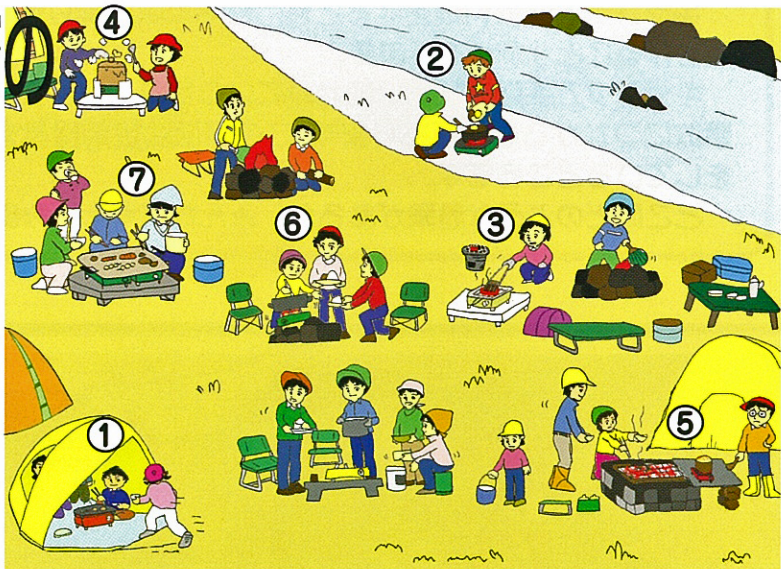
キャンプで野外料理をするとき、日常ではあまり使用しない器具を使って料理を作ることが多くあります。
キャンプで手軽に便利に使われている器具でも、使い方を間違えると思わぬ事故につながる危険があります。この場面は燃焼器具を使用して、食事の準備をしているところです。
どこにどのような危険があるか、みんなで考えてみましょう。

5 野外料理での危険 (燃焼器具編)



5. 野外料理での危険 (燃烧器具編)

ここが危ない！



① テントの中でコンロを使用

テントの中でコンロを使用しています。密閉したテントの中でコンロ類を使用すると、酸欠や一酸化炭素中毒、テント火災などの危険があります。このような危険を避けるために、テントの中ではコンロを使用しないようにしましょう。特に炭火の使用は厳禁です。



② 河原でコンロを置いて使用



コンロを河原に直接置いて使用しています。夏の炎天下の河原や砂浜などは、石や砂が直射日光で焼けて熱くなり、コンロのガスボンベが加熱され爆発する危険があります。このような危険を避けるために、ガスボンベが直接加熱されるような場所ではコンロを使用しないようにしましょう。

③ コンロで炭火を起こしている

ガスコンロの上で炭の火起こしをしています。コンロの上で炭や練炭などの火起こしをすると、輻射熱でコンロ内のボンベが過熱して爆発する危険があります。このような危険を避けるために、炭の火起こしにはガスコンロ等を使用しないようにしましょう。



④ コンロが囲われている

コンロの上のせてある鍋が、コンロの上を覆っており、周囲が風よけで囲まれてしまっています。このようにコンロが完全に覆われてしまうと、ガスボンベに熱がこもりボンベが過熱して爆発する危険があります。このような危険を避けるために、コンロを囲ってしまうような使用は避けましょう。



⑤ 火気の近くでコンロを使用

火が燃えているかまどのすぐそばで、コンロを使用しています。火気からの輻射熱で、コンロ内のガスボンベが過熱して爆発する危険があります。このような危険を避けるために、かまどに限らず火気のすぐ近くでのガスコンロの使用は避けましょう。



⑥ 不安定な場所でコンロを使用

積み上げた石の上でコンロを使用していますが、コンロが傾いています。このままでは、いつ滑り落ちるかわかりません。コンロが滑り落ちると、やかんや鍋で熱せられていた熱湯や煮物などが飛び散って火傷を負う危険があります。このような危険を避けるために、コンロは平らで安定した場所で使用しましょう。



⑦ コンロを2台並べて使用

鉄板焼をしています。鉄板の下を見るとコンロを2台並べて使用しています。コンロをこのように2台以上並べて使用すると、コンロ内に熱がこもりボンベが過熱して爆発する危険があります。このような危険を避けるために、コンロを並べて使用することは絶対にしないようにしましょう。



どこにどのような危険があるか考えてみよう

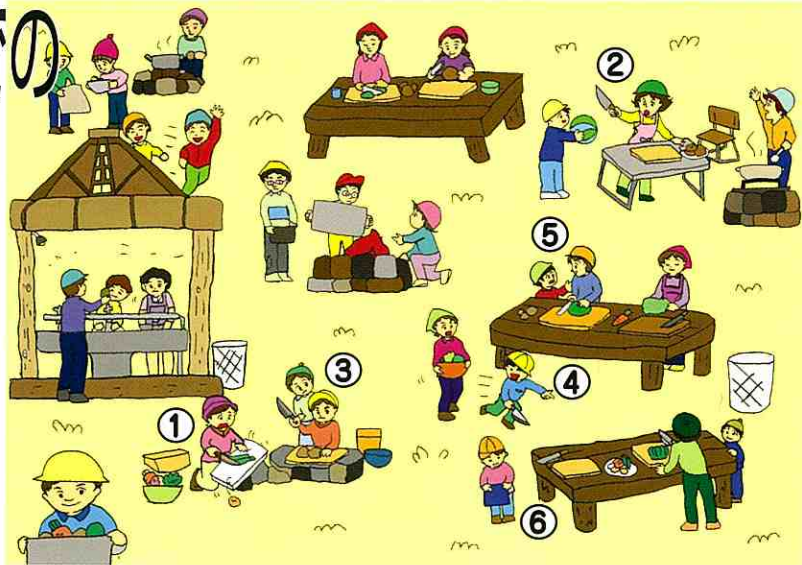
野外料理は、キャンプの楽しみの一つでもあり、おいしさも格別です。この場面は、食事の準備をしているところですが、この中にも事故につながる危険な行動をしている人や事故につながる危険な状況があります。どこにどのような危険があるか、みんなで考えてみましょう。

6 野外料理での危険 (調理用具編)



6. 野外料理での危険 (調理用具編)

ここが危険！



① 不安定な場所にまな板を置いて包丁を使っている

石の上にまな板を置いて包丁で何かを切っていますが、まな板が傾いて不安定な状態になっています。このままでは、まな板がすべり包丁で手を切る危険があります。まな板は、平らで安定した場所に置いて包丁を使いましょう。



② 包丁の先を子どもに向けている

大人が包丁の先を子どもに向けて、何か話をしています。包丁を人に向けるのは危険とわかっていても、つい忙しいときなどに包丁を持った手で指図したりしてしまうことがあります。包丁がそばの人に当たれば、思わぬ大怪我をしてしまう危険があります。このような危険を避けるために、どんなに忙しく気ぜわしいときでも、ついうっかりして包丁を人に向けてしまうことがないように細心の注意を払いましょう。

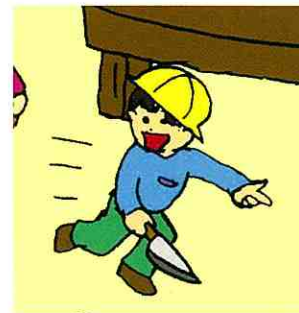


③ 包丁を振り上げている 近くに子どもがいる

何か硬いものでも切っているのでしょうか、包丁を振り上げている後ろに、子どもが立っています。子どもですから転んだりつまずいて、まな板の上に手をついたり、覗き込んで包丁による怪我を負う危険があります。このような危険を避けるために、刃物を使うときには周囲に注意を配り、常に子どもがいないことを確認しながら使用しましょう。また、子どもには、刃物を使用しているときには、近づかないように注意しておく必要があります。



④ 子どもが包丁を持って走っている



包丁を持った子どもが、走っています。包丁を持って走るだけでも危険なのに、よそ見をしています。石などにつまずいて転ぶと、大怪我をする危険があります。このような危険を避けるために、包丁に限らず刃物を持って走ったり、ふざけたりしないように、事前に注意を与えとともに、しっかりと見守りましょう。

⑤ よそ見をしながら包丁を使っている

料理の手伝いで、子どもが包丁で何かを切っています。よそ見をするだけでも危険なのに、おしゃべりに夢中になっているように見えます。包丁を使っているときに、よそ見やおしゃべりをすると、どうしても手元がおろそかになり、ケガをする危険があります。子どもがキャンプに来て、料理などを手伝うことはとても良いことですが、怪我をしてしまったは何もありません。このような危険を避けるために、事前に刃物を使用するときの注意を忘れずにおきましょう。



⑥ 包丁が調理台の端に置かれて

包丁が無雑作に調理台の端に置かれています。すぐ近くにいる子どもが包丁に触れたり、包丁が落下して傷を負ったりする危険があります。このような危険を避けるために、刃物を置く場所には気を配るとともに、ナタやナイフなどは、使わないときにはケースに収めるようにしましょう。



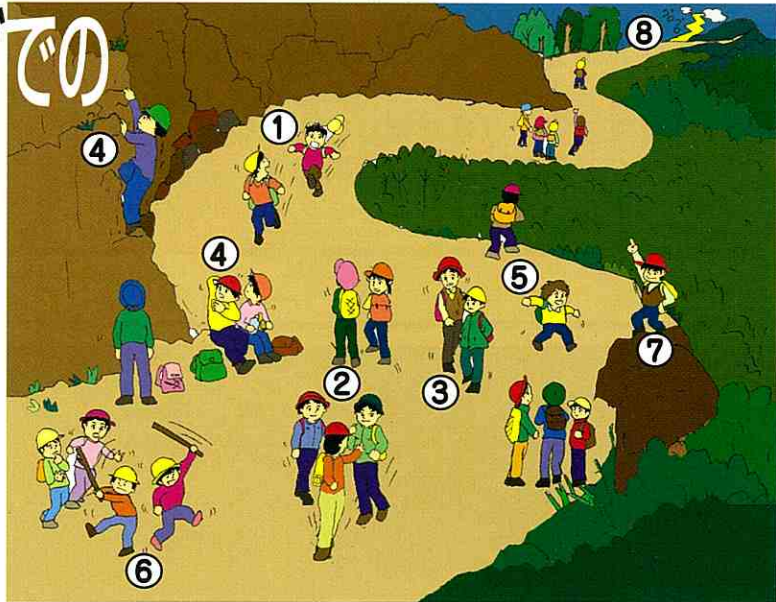
どこにどのような危険があるか考えてみよう

キャンプ中にハイキングに行くことがあります。この場面は、ハイキングの一コマです。家族や仲間同士で、楽しそうにハイキングしていますが、事故につながる危険な行動も見受けられます。どこにどのような危険があるか、みんなで考えてみましょう。

7 ハイキングでの危険



7. ハイキングでの危険



ここが危険！

① 子どもがハイキング道
を走って下っている

子ども二人がハイキングコースの坂道を走って下っています。疲れもなく元気なことはよいのですが、ハイキング道は平坦な道ばかりではありません。下りの坂道は走るとスピードがつき、転んだり人とぶつかってしまう危険があります。

その他にも、勢いあまって曲がり道を曲がりきれずに転落する危険もあります。歩いているときは違ってスピードがついている分、怪我や事故の程度も大きくなります。この場面では、前を走っている子どもが後ろの友達を見ながら、よそ見をしていますが大変危険です。事前に注意しておきましょう。



② 話をしながら歩いている
話をしてながら後ろ向き

仲間と楽しく話をしながらハイキング道を下っています。楽しく話をしながら歩くのはよいのですが、足元に注意しなければ、つまずいたり転倒したりして危険です。この場面のように、下り道を後ろ向きで歩くのはとくに危険です。狭い道では足を踏み外して崖から落ちるといことも考えられます。ハイキング道では足元に注意しながら、前方をしっかり見て歩くことを心がけましょう。



③ ポケットの中に両手を
入れて歩いている

ハイキング道を下っている子どもが、ポケットの中に両手を入れて歩いています。子どもの近くにいる大人が、ポケットから手を出して歩くように注意をしているのでしょうか。両手をポケットの中に入れて歩いていると、石につまずいたり木の根に引っかかるなどして転倒したときに両手をつくことが出来ず、顔などに大怪我を負ってしまいます。歩くときには、常に両手が自由に使えるようにしておきましょう。



④ ハイキング道の山側を
よじ登っている



いっしょに来ていた仲間と休憩していたのですが、そのうちの一人が山側の切り立ったところを登ろうとしています。このような場所では、登る途中で本人が滑り落ちたり、落石を誘発して下にいる仲間へケガをさせる危険があります。

休憩しているとはいえ、子どもはちょっとからだを休めると何かをしたくなるものです。ハイキング道では、こうした行動の他に落ちていた石を拾って、谷側の方に投げたりすることもよく見られます。しかし、ハイキングコースでは、どこに人がいるかわからないので投石などは厳禁です。

⑥ ハイキング道で子どもが棒を振り回して
遊んでいる

子どもがハイキング道で棒を振り回しています。元気なのは良いとしても、近くを歩いている人に当たったり手からすっぽ抜けたりして、他の人にケガをさせる危険があります。このような危険を避けるために、子どもを引率する場合には、事前に他の人に迷惑をかけないように注意するとともに、ハイキング中にも十分注意をするようにしましょう。



⑦ 道端にある岩に上がっている

コースの途中に、手ごろな岩があると、つい上がってみたいくなるものです。この場面のようにハイキング道の端で、それも谷側にある岩に上がるのは危険です。岩が雨上がりで濡れていたり、コケが生えていて滑りやすくなっているかもしれない。また、履いている靴が滑りやすいかもしれません。岩の上で過って滑り、谷側の崖のほうにでも落ちると重大事故になりかねません。安易に岩などに上がることは危険ですので気をつけましょう。



⑧ 山の頂上付近で雷が鳴っている

山の頂上付近に雷雲が発生し、雷が鳴っています。まだ、この場面では雨は降り出していないようです。やがて雷雲が近づいてきて雨や雷になるでしょう。このままハイキングを続けると雨に降られるだけでなく、落雷の危険もあります。落雷の危険は、雷鳴が聞こえる範囲といわれています。このような天気には、すぐにハイキングを中止して下山しましょう。

ハイキングに出かけるときには、事前に気象情報で天気を確認し、大雨や雷の予報が出ているときには、無理をせずに中止しましょう。その地方の天気については、地元の人やキャンプ場の管理者に尋ねることも有効です。



どこにどのような危険があるか考えてみよう

子どもたちが川遊びをしています。楽しそうに遊んでいるからといって
安心はできません。よく見ると危険な遊びをしている子どももいます。こ
のままでは事故につながりかねない状況があります。
どこにどのような危険があるか、みんなで考えてみましょう。

8 川遊びでの危険



8. 川遊びでの危険



ここが危険!

① 石伝いに川を渡ったり、跳んだりしている

水面から出ている石の上を伝って、川を渡ったり、跳んだりしている子どもがいます。川の中の石は、濡れていたり、コケ等で滑りやすくなっています。このため石の上でバランスを崩して転び、頭や腰などをぶつけて大怪我をする危険があります。また、水の中を歩くときにも、川底にある石は、滑りやすくなっていたり、グラグラしているものがあって危険です。川の中では安全を確かめながらゆっくり歩きましょう。



② 岩の上から飛び込もうとしている

今にも岩の上から川に飛び込もうとしています。岩は水面に出ている岩もあれば、水中に隠れている岩もあります。また、水中には大きな石もあります。飛び込んで頭をぶついたり、飛び込む前に岩から滑り落ちて大怪我をすることもあります。川の中に飛び込むのは危険です。また、飛び込む位置が高くなればなるほど、危険性が増すこととなります。子どもが岩の上にいるときには、様子を見守り飛び込まないように注意しましょう。



③ ヤスを振り回している

魚でも捕ろうとしているのでしょうか、ヤスを持って川の中に入っています。魚を捕ろうとするのはよいのですが、ヤスを振り回して危険です。近くを見ると他の子どもたちも遊んでおり、振り回しているヤスの先端部が当たったり刺さったりすると大怪我をします。ヤスのような先の鋭い物を扱うときには、事前に事故につながることを知らせるとともに、安全な扱い方について教えておく必要があります。



④ ばで大人が立ち話をしている子どもが川遊びをしている

川の中で子どもたちが楽しそうに遊んでいますが、そのそばで子どもたちの様子を見守っていない大人が立ち話をしている、子どもを見ていません。川での子どもの事故は、大人が目を見守ったほんの僅かな間に起きています。浅い川だからといって安心はできません。水深が子どもの膝下ぐらいの川であっても、溺れることがあります。このような危険から子どもたちを守るために、川で遊ばせるときには事前に水流や川底の状態、水深などについて調べ安全を確認しておく必要があります。また、川遊びをしている間は、その近くで片時も目を離さず見守るとともに、危険な遊びや行動については、その都度注意するようにしましょう。



⑤ 川の中に石を投げている

川に向かって石投げをして遊んでいる子どもがいます。川の中では子どもがたくさん遊んでいて、投げた石が遊んでいる子どもに当たって怪我をすることも十分考えられます。このような場所で、石を投げて遊ぶことは危険です。石投げをするときには、川の中に誰もいない安全な場所で、しかも1回ごとに人がいないことを確認して投げるようにしましょう。



⑥ 遊んでいる子どもの足元に割れたビンがごろごろしている

河原で遊んでいる子どもの足元に、割れたビンやガラスの破片が散乱しています。遊びに夢中になって、素足で割れたビンやガラスの破片を蹴飛ばしたり、破片を踏みつけると、足に切り傷を負ったりビンの破片が突き刺さるなどの危険があります。河原には、その他にも危険物があります。河原で遊ぶときには、事前に“危険物”を取り除いておきましょう。また、安全のために、河原や川の中で遊ぶときには、運動靴などを履くようにしましょう。



どこにどのような危険があるか考えてみよう

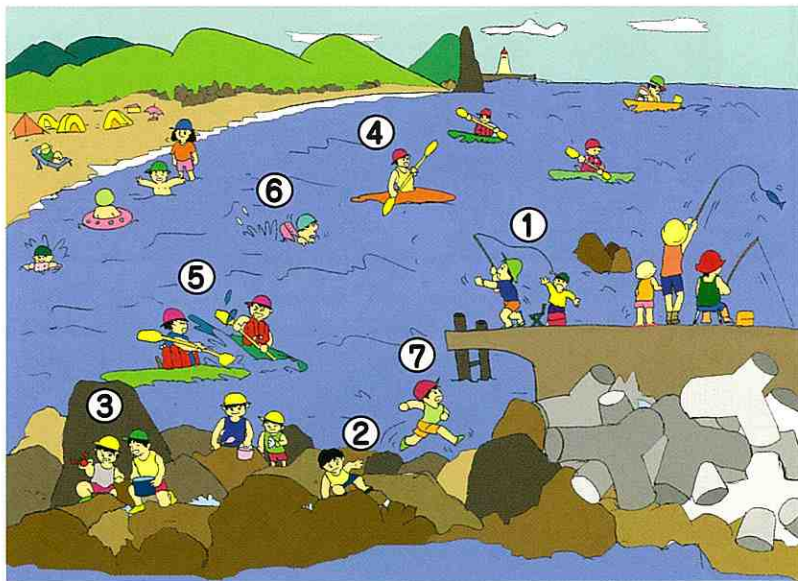
この場面は、海辺でキャンプしているときに見られる光景です。楽しそうにいろいろな活動をしているますが、事故につながる危険な遊びや行動も見られます。
どこにどのような危険があるか、みんなで考えてみましょう。

9 海辺での危険



9. 海辺での危険

ここが危険！



① 釣りをしている子どもが釣っている

桟橋で釣りをしていますが、釣りをしている人のすぐそばで、幼い子どもが釣りをしています。このような状況で誤って釣り針を子どもに引っ掛けてしまう事故がよく発生します。

針の引っ掛かる部位によっては、大きな怪我につながります。このような危険は子どもに限らず、大人にも言えることです。釣りをするときには、このような危険があることを子どもに教え、大人も十分気をつけなければなりません。

また、釣りをする人もこのような危険を防ぐために、周囲の安全を確認する必要があります。



② 無帽で磯遊びをしている

磯遊びをしている子どもの中に、帽子をかぶっていない子がいます。夏の炎天下で、長い時間にわたって帽子をかぶらないでいると、日射病になる危険があります。

日射病を予防するには、子どもが気をつけるだけでなく大人も常に気を配らなければなりません。

磯遊びや砂浜で遊ぶときだけでなく、日差しが強いときには、必ず帽子をかぶらせ、こまめに水分補給をすることが大切です。



③ 素手で磯の生物や貝をとっている



磯の生物は、カニのようにハサミで挟むものや、刺すもの、刃物のような先端をもつ貝類など危険なものがいっぱいです。このような生物を観察したり採取するときは、直接手を触れないで、採取する道具や軍手などを準備することが大切です。

④ フローティングジャケットを身につけずにカヌーに乗っている

カヌーを楽しんでいる人がいますが、一人だけフローティングジャケットを着けていません。沖に出ないから、浅瀬だから、自信があるから…と、フローティングジャケットを着けない理由がいろいろあるでしょう。しかし、他のカヌーが接近して来たのを避けようとしてバランスを崩して転覆したり、風で沖に流されて転覆するということがあります。

海の事故では、フローティングジャケットを身につけていたか否かで、明暗が分かれています。油断や過信は禁物です。カヌーに乗るときには、必ずフローティングジャケットを身につけましょう。



⑤ カヌー上でふざけあっている

カヌー上で水の掛け合いをしていますが、水の掛け合いがエスカレートしてバランスを崩し、パドルが相手に当たってケガをする危険があります。また、二人の近くに人がいたときには、単に迷惑するだけでなく、周りの人にパドルが当たって怪我をする恐れがあります。カヌーに乗艇しているときには、自分の安全だけでなく他のカヌーや泳いでいる人に迷惑がかからないよう配慮を忘れないようにしましょう。



⑥ 子どもが一人で沖に向かって泳いでいる

浮き輪を使って泳いでいる子どもが、一人で沖に向かって泳いでいます。浜辺の方で遊んだり泳いでいる子どもには、大人が付き添って見守っていますが、沖の方に向かって泳いでいる子どもにまで目が行き届いていません。このままでは沖に流されたり、高波によって溺れる危険があります。

子どもが水遊びや泳いでいるときなど、どんな場合でも、大人は子どもから片時も目を離さないようにしなければなりません。浮き輪をつけているからといって、安心は禁物です。



⑦ 子どもが岩の上を跳びながら渡っている

この子どもはどこへ行こうとしているでしょうか、岩の上を跳んで渡っています。海辺にある岩は、波や潮の干満で濡れて滑りやすくなっており危険です。

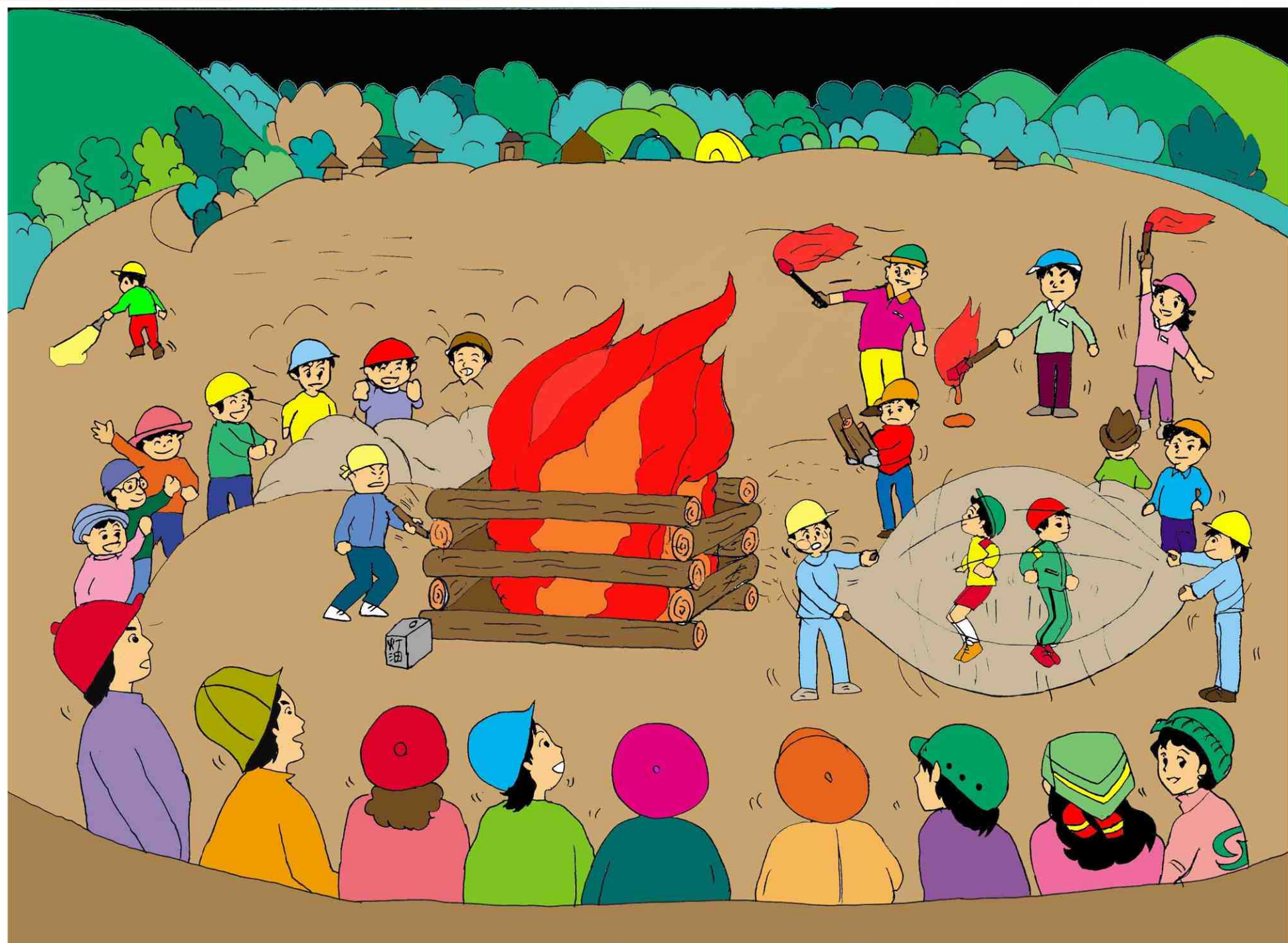
このように滑りやすくなっている岩は、歩いて渡るだけでも危険なところですが、この場面のように岩の上を跳んで渡るのは、よりいっそう危険が増します。滑って転ぶと、大怪我をしてしまう危険があります。このような危険を避けるために、子どもに事前に注意するとともに、絶えず子どもの遊びや行動に気を配ることが大切です。



《どこにどのような危険があるか考えてみよう》

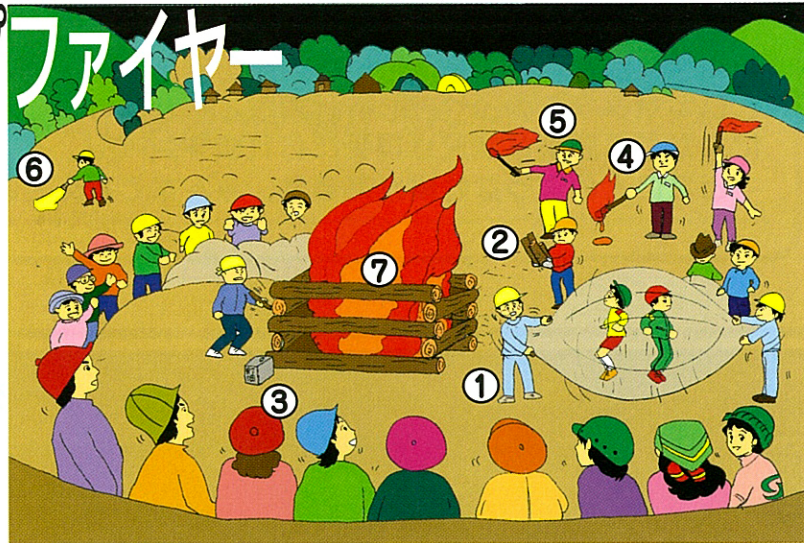
キャンプファイヤーはキャンプの楽しみの一つです。歌ったり、踊ったり、ゲームなどをして楽しいひと時を過ごすことができます。しかし、楽しいキャンプファイヤーにも危険なことがあります。この場面には、事故につながる危険な状況が見受けられます。
どこにどのような危険があるか、みんなで考えてみましょう。

10 キャンプファイヤーでの危険



10. キャンプファイヤー での危険

ここが危ない！



① 出し物を演じている一人が燃えている井桁に近づきすぎている

班の出し物で“ダブルタッチ”をしているようです。縄を持っている一人が燃えている井桁を背に立っていて、火の粉や炎で火傷を負う危険があります。キャンプファイヤーでは、このような出し物を演じるときや踊ったりゲームをするとき、つい夢中になってしまい、燃えている井桁に近づき過ぎて火傷を負うことがあります。

このような事故を防ぐためには、本人自身が気をつけることは当然ですが、気がついた人がすぐに注意する事が必要です。

また、井桁を組むときに、井桁の周りを囲むように薪などを置いて火に近づきすぎないための目印としておくと、よいでしょう。



② ファイヤーキーパーが風下から井桁の中に薪を入れに行っている

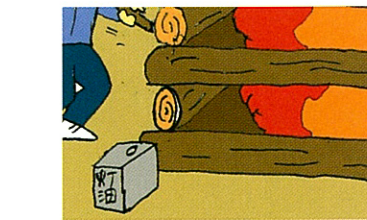
キャンプファイヤーのファイヤーキーパーには、燃えている井桁の火をコントロールするという大切な役割があります。

この場面では、ファイヤーキーパーが風下から燃えている井桁に薪を持って近づいています。風下から井桁に近づくと、炎や火の粉をまともに浴びて大変危険です。

ファイヤーキーパーはこのような危険から身を守るために、必ず風上から井桁に近づくようにします。また、ファイヤーキーパーは火傷防止のために、帽子をかぶり長袖・長ズボンと熱に強い革手袋をつけた服装を整えましょう。



③ 燃えている井桁の近くに灯油缶が置かれている



井桁を組んだときに置き忘れたのでしょうか、燃えている井桁のすぐ近くに灯油缶が置かれています。缶が熱せられて爆発の危険があります。缶が爆発して炎をキャンパーが浴びることになったら大変です。

キャンプファイヤーの準備で井桁を組むなど一通りの作業を終えた後には、井桁の近くに火が燃え移る危険な物などがいないか確認することを忘れないようにしましょう。

④ 灯油が流れ落ちてきているトーチを持っている

次の出し物でトーチを使った演技でもするのでしょうか、トーチを持って立っている人がいます。持っているトーチの先の部分を見ると、トーチに浸した灯油が流れ落ちています。このままトーチを持ち上げ立ると、灯油が手元の方に流れ、火が走り火傷を負う危険があります。

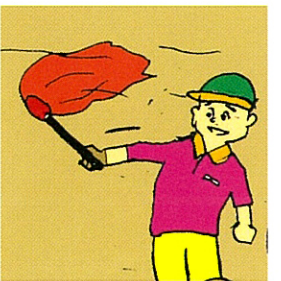
ファイヤーのトーチは、灯油に浸した後、灯油が垂れないようによく搾り取っておくことが大切です。トーチを持つときには、手には火に強い革手袋を必ずつけておきましょう。



⑤ 持ったトーチの炎が風にあおられて顔に向かってきている

火のついたトーチを持ち上げていますが、風にあおられてトーチの炎で顔が火傷しそうになっています。このようなトーチによる火傷を防ぐためには、風の吹く状態や風向きを考えて持たなければなりません。

トーチは必ず風下にして先端を上げて持つようにします。子どもがトーチを持つときには、必ず大人が見守るようにしましょう。そしてトーチを持つときには、革手袋を忘れずにつけましょう。



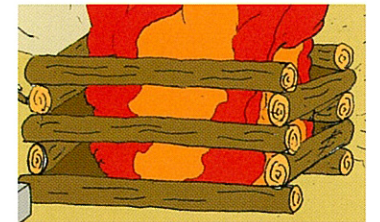
⑥ 一人の子どもがキャンプファイヤー場から離れて山の方に向かって歩いている

キャンプファイヤーに飽きてしまったのでしょうか、一人の子どもが山の方に向かって歩いています。

子どもも大人も一緒になって、キャンプファイヤーを楽しむのはよいのですが、つい夢中になりすぎて全体に目が行き届かなくなってはいけません。この場面に見られるように、まだキャンプファイヤーが続いているのに、その場を離れてしまう子どもがいるかも知れません。単独で行動することは大変危険です。ファイヤー中は一人ひとりの子どもに十分気を配りましょう。



⑦ 組まれている井桁が大きすぎる



キャンプファイヤーで組まれる薪には、いろいろな組み方があります。この場面では、「井桁」で組まれています。ファイヤーの楽しさは、エールマスター（進行係）が作り出す雰囲気もありますが、中央で組まれた井桁が燃える明るさも大切です。

しかし、むやみに大きな火にするのは考え物です。この場面のよう、過ぎる丸太で、大きな井桁を組むことは危険です。

また、自然環境の保護や資源の無駄遣いをなくすためにも、ファイヤーの火は適度な大きさにしましょう。



NCAJ

National Camping Association of Japan

安全なキャンプのために PART 4 2006年6月25日発行

編集 社団法人 日本キャンプ協会 安全管理委員会
イラスト 吉田雅江
発行者 酒井哲雄
発行所 社団法人 日本キャンプ協会
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1
国立オリンピック記念青少年総合センター
TEL 03-3469-0217 Fax 03-3469-0504
E-mail ncaj@camping.or.jp www.camping.or.jp

この冊子は平成15年用寄附金付お年玉付郵便葉書等寄附金で作成しました。

Copyright (社)日本キャンプ協会 無断転載禁ず